

大阪肢体不自由児サービスグループ（SG）設立の経緯と これまでの活動のあらまし

- ・ SG設立時の状況とSGが目指すもの(1)
- ・ SG活動の中心は夏季キャンプ(2)
- ・ 車いすを前提としたキャンプへの転換とキャンプ場の確保(3)
- ・ ジュニア活動などの日常活動の取り組み(4)
- ・ 重度障害児と卒後問題への対応(5)
- ・ 『かたつむり21』の支援活動とこれからのSG活動(6)





奉仕活動ではなく社会的な連帯責任として

大阪肢体不自由児サービスグループの生い立ちは、昭和40年(1965年)8月に開かれた「肢体不自由児の親子キャンプ」に9人ほどの大学生を中心とするリーダーが集まったことに始まります。場所は大阪北部、能勢にあるダイヘン健康保険組合のキャンプ場。それまで、大阪府肢体不自由児協会(当時)のボランティアリーダーとして活動していた若者たちが、子どもたちや親の“真の願いに応える活動”を真剣に模索していた頃です。

当時は「ボランティア」と言う言葉も一般的でなく、障害者に対する社会の理解や行政施策は乏しく、障害児は学校にも行けず、機能訓練を受ける機会すら与えられない状況でした。



能勢親子キャンプの一コマ

能勢親子キャンプでのお母さん方との対話を通して、福祉行政の現状は、子どもや親の真の願いとはほど遠いことを痛感させられました。こうした願いに応えるには、形通りのボランティア活動ではなく、多少の困難があっても、自らがニーズを直接受け止め、地道な活動を着実に実施していくべきであるとの思いに至りました。

そして、1965年9月11日(土)、『大阪肢体不自由児サービスグループ(SG)』が誕生しました。メンバーは、大学生や社会人などわずか12人です。

特に“社会奉仕(当時のボランティアへの一般的理解)”ではなく“社会的な連帯責任”を原点に据え、ボランティア活動の日常化を趣旨としたことは、当時としては先駆的な考え方であり、今日までの活動の柱となっています。

「育てる会」との連携による訓練施設づくり

同じ時期に、能勢キャンプに参加したお母さん方を中心に保護者団体『肢体不自由児を育てる会』が発足し、SGと協力しながら、車の両輪として活動を開始しました。

まず、育てる会と一緒に手がけたのが、肢体不自由児のための機能訓練施設づくりです。昭和40年12月に、大阪市内に育てる会が自主運営する『たまつくり療育園』を開設しました。翌年、済生会吹田病院に引き継いで頂き、「大阪府済生会吹田療育園」として再出発しました。

当初は、SG・育てる会の事務局を吹田療育園に置き、三者の協調関係が保たれましたが、1997年に吹田療育園が移転(南高浜町一川園町)し、2001年には育てる会が活動を休止したこと等により、相互間の関係は薄れ、吹田療育園は現在独自の道を歩んでいます。



たまつくり療育園での訓練の様子

当初は「親子キャンプ」と「ファミリー・クリスマス会」が活動の二本柱



第一回ファミリークリスマス会

SG活動は、育てる会との共同歩調を趣旨としたことから明らかなように、当初は、学齢前の重度肢体不自由児とその親を対象とする様々な支援活動でした。その一つは当然「親子キャンプ」ですが、もう一つは、肢体不自由児の親子を対象にした「ファミリー・クリスマス会」です。大阪市東淀川区にあるダイヘン厚生会館で開催した第一回は75組・200名の参加があり、その後も一般公募により参加される家族が増加し、毎回4~500名規模の大規模な行事になりました。

この行事は13年間継続しましたが、事前準備が大変な割には、一過性の行事に陥っている可能性があり、1977年の「ファミリー・クリスマス会」を最後に休止することとなりました。



資金活動は街頭募金

SGを創設したものの、独自に活動資金をどのように調達するかが大きな問題でした。ライオンズクラブ等から寄附も頂きましたが、グループ員総掛かりでキャンプとクリスマス会の前に「街頭募金」に取り組みました。1987年まで続きましたが、社会人のグループ員比率が高まり、時間的制約のため中止することになりました。



59組の親子、総勢約130名が集まった「びわ湖療育キャンプ（1967年・青柳浜）」

親子キャンプからスタート

SG活動の中心は、何と言っても夏のキャンプです。SG設立以来、毎年欠かすことなく続いています。自然の中には、まだまだ手づくりの要素が多く、ましてや日頃から外に出かける機会が少ない肢体不自由児には、未知の経験です。それが、子どもたちの目をより一層輝かせ、感動させ、その笑顔の中にSG活動を継続させる原点があります。

幼児期の肢体不自由児とその母親を対象に始まった「親子キャンプ」は、「療育キャンプ」と位置づけ、理学療法士や作業療法士の指導の下に「訓練時間」を設けるとともに、保護者座談会にSG委員会メンバーも加わり、障害児を抱える家族の悩みを共有することに務めました。



びわ湖青柳浜での親子キャンプ（1967年）



能勢ダイハンキャンプ場での単独キャンプ

単独系キャンプの開催

肢体不自由児を持つ家庭の悩みを理解する上で、親子キャンプの意義は大きなものですが、子どもたちの成長とともに、親元から離れ一人でキャンプに参加できる子どもが増え、1969年からは小学生を対象とした「単独キャンプ」が始まりました。

子どもが単独で参加することに親の不安もありましたが、案ずるより産むが安しで子どもたちは大喜びでした。また、SGにとっても、子どもたちから様々なことを直接学ぶ機会ともなりました。

SG委員会としては、障害を持つ子どもたちと直接関わることの必要性を重視し、2年後の1971年には中学・高校生を対象とする「ジュニアキャンプ」を開催することになり、「親子」、「単独（小学生）」、「ジュニア（中・高校生）」の3キャンプ体制が整いました。

最盛期は一夏に4キャンプも実施

その後、「ジュニアキャンプ」の参加希望者が増加したため「中学生キャンプ」と「高校生キャンプ」に分離することになり、1974年からは、親子・単独（小学生）・中学生・高校生と、一夏に4回ものキャンプをこなす時期が1977年まで続きました。

ただ、親子キャンプは、毎回平均20組程度、多い時には二回で75組もの参加がありましたが、徐々に参加者数が減少し1979年で休止し、1980年からは単独系のキャンプのみを開くこととなりました。



1974年の中学生キャンプ



1977年高校生キャンプ（能勢・大堂キャンプ場）

単独系キャンプも中・高校生対象に

小学生から始まった単独系キャンプも、重度の障害を持つ子どもの増加とともに低年齢の子どもが一人で参加することが少なくなってきました。一方で高校生の参加希望は高く、中・高校生がSGキャンプの中心になってきました。

このため、1983年からは小・中学生の合同キャンプと高校生キャンプとの二本立てに改編し、1990年以降は、小学生の募集を休止しました。これ以降、SGキャンプの対象は中・高校生を中心に実施することとなり、今日に至っています。



1979年が一つの転機

1981年が「国連障害者年」と位置づけられ、世界的に障害者の社会参加に対する社会の関心が高まり、我が国では2年前の1979年4月から養護学校の義務化が実施されました。

障害児は、それまで就学免除や猶予といった形で、長らく学校に行きませんでした。養護学校には軽度の障害児が選考を受けて通っていたのです。1979年の法改正により、子どもたち全員の教育を受ける権利が保障され、重度の障害児が養護学校に通えるようになりました。



1980年以降、参加者の大半は車いすを利用



2003年うみキャンプ（びわ湖）

人手がかかり、リーダーの確保が大きな課題になっています。

重度の障害児を対象とするキャンプに転換

1970年代前半までの単独系キャンプに参加する子どもたちは、補装具などを使用することがあっても、大半は片手介助程度で歩行でき、車いすの利用は数人でした。それは、重度障害児との関わりを願いつつも、SGとして把握できていなかったからです。

1980年代に入って、養護学校に通う重度の子どもたちに案内を出すことができるようになり、キャンプ参加者の多くが車いすやバギーを使用する子どもたちになりました。

それに伴ってキャンプ・プログラムも、安全面や時間的ゆとりの確保に十分に配慮した形態へと変化し、今日に至っています。ただ、食事やトイレ、着替え、移動等の介助に

能勢・ダイヘンキャンプ場がホーム・グラウンド

SG創立以来、能勢のダイヘンキャンプ場（ダイヘン(株)が開設）をホーム・グラウンドにしてきました。SG創設期からグループの顧問をして頂いていた古今堂雪雄先生（故人）が同社健康保険組合の役員をされていた関係からです。

3000坪程度の段々畑と朽ち果てかけの旧寒天小屋を利用したもので、ほぼSGが独占的に利用させて頂いていました。開設後10年間は、毎年10日間ほど、グループ員総掛かりで草刈りや整地のためのワークキャンプが欠かせませんでした。多い時には、このキャンプ場で一夏に3キャンプを開いたこともあります。

ただ、このキャンプ場が1976年以降、会社側の都合で使えなくなり、一般キャンプ場を使用することとなりました。



ダイヘンキャンプ場の旧寒天小屋



朽木村での高校生キャンプ（1985年）

アサヒキャンプ・朽木村など近畿各地のキャンプ場で

その結果、近隣府県の様々なキャンプ場で開催してきましたが、特に、滋賀県朽木村にある「アサヒキャンプ場」には、1982年から15年余にわたりお世話になりました。この間、キャンプ場では、車いすの移動のために段差解消など様々な改善を加えて頂きましたが、キャンプ場そのものが閉鎖になり、1998年以降は使えなくなっています。

また、1990年頃から、びわ湖の大阪市立青少年の家も頻りに利用しています。その他、豊能町の大堂キャンプ場、信太山の野外活動センター、兵庫県美方町キャンプ場を始め、奈良や和歌山など様々なキャンプ場で開催しています。

ただ、結果的には初期に比べ行動範囲も広がり、子どもたちに新鮮な感動の場を提供する機会が増えるという効用がありました。昨2008年のキャンプでは三重県の伊賀まで出かけました。

様々な工夫を凝らしたキャンプを開催

SGキャンプの特徴は、実施を計画する委員会が子どもたちの状況や時代の要請を受け止め、その都度工夫を凝らしていることです。1981～83年には、健常児との交流を目指し、ボーイスカウト、ガールスカウトとの交歓キャンプを行いました。

また、1991～1997年の中・高校生キャンプでは、びわ湖で開く「うみキャンプ」と滋賀県・朽木村で開く「やまキャンプ」の2キャンプを開催し、キャンパーがいずれかを選択する方式を採用しました。

しかし、ここ数年リーダーの確保が目に見えて困難になってきており、実施回数や期間が縮小しています。残念ながら1998年以降は、年間一キャンプ（2泊3日）となっています。



小学生ボーイスカウト交歓キャンプ（1981年）



ジュニア活動などの日常活動の取り組み

キャンプ・アフターケアの諸行事は欠かさず実施

SGでは、単独系のキャンプを実施した1969年以来、今日まで「思い出会」と「アフターケア行事」を欠かさず実施してきました。

思い出会はキャンプ熱の冷めない9月頃に開催し、キャンパーとリーダーが再会して、キャンプ・ソングやゲームを楽しむ集まりです。同時に、キャンプ中の写真を展示し焼き増しの申し込みを受け付けています。また、その年の秋～翌年の春までには必ずアフターケア行事として遠足やハイキング等に出かけています。



2001年キャンプ思い出会



1999年ジュニア・秋の遠足（大阪城公園）

1969年にジュニア活動を開始

このキャンプ後の行事とは別に、日常的に直接障害児と関わる活動を始めたのも、1969年からです。それまでは、親子を対象に幼い障害児とその保護者との関わりが中心でしたが、障害児との日常的な関わりを通じて悩み等を共有したいというグループ員の思いから、中・高校生を対象とした「ジュニア活動」が発足しました。

ジュニア活動は、学校から帰った後、家に閉じこもりがちな肢体不自由児のクラブ活動のようなものです。最初は、ハイキングなど戸外に出ることから出発しましたが、子どもたちからの要望を受け、1971年から定例の集いになりました。

月2回のジュニア活動

定例の集いとなったジュニア活動は、最初、毎月偶数土曜日に清水会館（大阪市旭区）で開く高校生の「おしゃべり会」のようなものでした。当初は府内の各地から集まりましたが、障害の重度化に伴い、往復の所要時間等の関係から大阪市立光陽養護学校の生徒が中心になってきたため、その後、同校の中・高校生を対象に変更し、場所も学校内の光友会館で開くようになりました。

その後、奇数土曜への変更等がありましたが、この月2回体制は1985年まで続きます。この頃のSGは、年間3～4回のキャンプ、12月のファミリー・クリスマス会の二大事業をこなしながら、隔週土曜のジュニア活動に取り組みました。加えて育てる会のお母さん方の趣味の会「土曜教室」（月2回）のサポートもあり、この頃が最も忙しい時期でした。



ジュニア鍋パーティ（1993年）



ジュニア・野球の練習風景（1982年頃）

時代とともにジュニア活動の内容も変遷

活動内容については参加メンバーの意見を基本にしましたが、出発当初は障害の軽い子どもたちが多く、野球等の行動的な活動が中心でした。特に、ジュニアの野球チームは合宿をしたり、堺養護学校との対抗試合を何度も行いました。

しかし、1980年代に入り重度障害の子どもたちの増加とともに、主として室内レクリエーションやゲーム等が中心に変化していきました。もちろん、光友会館の外に出る活動として、ボーリング大会や春・秋の遠足、施設見学、ハイキングなども定期的に行っています。

月1回から不定期開催に ～ キャンプ・アフターケアとの相互乗り入れ

毎月2回のジュニア活動は、委員会メンバーや担当の負担は大きく、また一方で、ジュニア卒業生対象のOB会活動、育てる会の土曜教室へのサポート等の関係から、1984年以降は月一回の活動に変更しつつも、1994年まで定期的な日常活動として継続しました。しかし、SG委員会の主力メンバーが時間的余裕の少ない社会人になってきたことにより、四半世紀にわたって定期開催してきたジュニア活動も、1995年以降は不定期開催のやむなきに至りました。

引き続き光陽養護学校の生徒を対象として、春・秋の遠足等の行事を中心に年間に数回、外に出かける活動になったジュニア活動ですが、ジュニア発足以来続いているクリスマス会は、保護者のご協力を得ながら、従来通り光陽養護学校の光友会館で開催してきました。

しかし、完全学校週5日制の実施（2002年4月）や、送迎等について保護者負担の増大もあって、養護学校をベースにした活動は難しくなり、ジュニア活動のあり方を大幅に変更することとなりました。それまで、ジュニア活動とキャンプの「アフターケア」行事は、それぞれ別個の事業でしたが、2000年頃から相互乗り入れを行っていたこともあり、2007年以降のジュニア活動は主としてこの方式となり、過去にSGキャンプに参加した子どもたちを対象に、遠足やもちつき大会、潮干狩りなどを行う活動になっています。



もちつき会（2008年・神戸）



高校卒業後の障害児・者とどう向き合うか

1971年のキャンプから単独系のキャンプに高校生を受け入れましたが、その頃は障害の程度は比較的軽く、高校卒業後、企業に就職できる子どもたちも多くいました。

しかし、1980年代以降のキャンプやジュニア活動に参加する子どもたちの大半が重度障害児になり、特に高校3年生の子どもたちにとって、卒業後は厳しい社会が待ち受けています。企業に勤めることはほとんどなく、作業所に通える子どもはまだまし、自宅にしか身の置き場がない子どもたちが多くいました。

このことはSG活動にとって大きな課題です。歴代の委員会が頭を悩ませながら、試行錯誤を繰り返していますが、未だ十分な対応策を見いだすことができていません。



2004年・やまキャンプ
重度の障害児にとって高校卒業後の展望が開けない



羽衣青少年センター
スポーツクラブ合宿 (1976年)

ワークメイツの取り組みの破たん

障害児の高校卒業後の問題は、1970年半ばから、SGばかりでなく育てる会でも徐々に顕在化してきており、1976年には、育てる会、吹田療育園との三者で「共同作業所づくりを進める会」を発足させ、ジュニア卒業生を対象に「スポーツクラブ（後に「ワークメイツ」と改称）」を結成しました。月2回、吹田療育園等に集まり、紙粘土細工の作品づくりや、和文タイプの技術習得を目指しました。ただ、参加者が2~3名にとどまり、さらに、メンバーが政治志向を強めたため、三者で協議し2年後に解散させました。

ジュニアOB会の結成と活動

1980年代のジュニア活動は月2回開いていました。高校生にとって卒業後、仲間たちと離ればなれになる寂しさは想像以上のものでした。そこで1983年4月、ジュニア活動の卒業生で「OB会」を結成し、定期的な集まりが始まりました。

最初はジュニアと合同の活動でしたが、独自の活動として楽器演奏の練習等に取り組み、1986年には「みんなでつくろうコンサート」にも出演しました。ただ、メンバー間での自主的な運営を目指したため、光友会館での月1回の活動も停滞気味になり、1992年頃から自然消滅の形となりました。



1991年春（天保山）
ジュニアとOB会・合同の遠足



1983年（能勢・大堂）
仲間づくりキャンプ

仲間づくりキャンプの試み

卒後の問題はキャンプに参加した高校生にとっても同じでした。高校3年生の『来年もキャンプにきたい！』との願いは切実です。そこで、ジュニアOB会と連動する形で、1983年に初めて成人（20~29歳）を対象とする「仲間づくり」キャンプを開催しました。

ジュニアOB会を中心としながら、かつてキャンプに参加した経験のあるメンバーにも呼びかけたものです。キャンパー、リーダーの区別なく全員が対等の関係で実施するキャンプでした。最初の頃は、キャンプ後も小グループ単位に行動的な活動を積極的に行っていました。

しかし、2泊3日のキャンプでは参加者が限られ、4年目以降は「1泊移住」「1泊お泊まり会」という名の宿泊行事に変更しました。また、参加者も光陽養護学校卒業生に固定化してきたため、再び「ジュニアOB会」に吸収することとなりました。この宿泊型の行事も保護者の送迎負担の問題から、継続が難しくなり1989年が最後となりました。

ハッピーフレンズ、そして「S・M・C」へ

ジュニアOB会が自主的活動を停止した後も、SG活動に参加してくれた子どもたちと高校卒業後もつながりを持ちたいとの思いから、1993年にSGキャンプの参加者を対象に「広域OB会」を結成しました。「ハッピーフレンズ」の活動です。

皆の消息を掲載した機関紙を発行したり、メンバーへのアンケートに基づいて、遠足やスポーツ観戦に出かけました。ただ、定例活動ではなかったため、SGメンバーの人員不足、担当の多忙等もあり、2001年の「お泊まり会」を最後に活動を休止しました。

2010年になって、日常活動の再開に向けた気運が高まり、高校卒業後の元キャンパー等に呼びかけ、「SG・マンスリー・クラブ（略称『S・M・C』）」を発足させ、月に一度は皆で何かしようという取り組みが始まりました。



鶴見緑地
ハッピーフレンズ遠足



かたつむり21の役割は、SG活動の後方支援

2001年4月、SG創立35周年を機に発足した「SG後援会『かたつむり21』」の役割は、SG活動をサポートすることです。具体的には、SG活動の拠点となる事務所を開設、維持するほか、物質面や精神面において後方支援を行うことです。

現在のかたつむり21の会員数は、かつてSG活動に汗を流した者ばかりでなく、一般の会員も徐々に増え、個人74人、法人2団体となっています。SGの長年の課題であった常設の事務所も、交通至便な場所（大阪市・長堀）にあるビルの一室に開設することができ、SGの委員会ミーティングや、諸々の事務作業、過去の資料の収集整理、キャンプ関連物品の保管等にフルに活用されています。

また、両者の連携を強めるため、SG委員会とかたつむり21の役員会に相互乗り入れを行っています。また、SGに対して活動資金の一部を援助しているほか、サマーキャンプ等の行事にもスタッフや裏方として会員が参加しています。



長堀事務所での「かたつむり21」役員会 (2007年9月)



2006年の能勢オータムキャンプ

かたつむり21のオータムキャンプ

一方、かたつむり21の独自事業として2001年の秋以降、原則として毎年11月に「能勢オータムキャンプ」を開催しています。SGキャンプの原点である能勢のダイヘンキャンプ場で行う一泊二日のキャンプです。

参加資格は一切なく、障害者やSG現役メンバー、一般の方々にも参加して頂いています。経験も世代も異なる参加者が少し肌寒い能勢の紅葉を楽しみながら、キャンプファイアーを囲み、おいしい食材・能勢の地酒「秋鹿」を味わうキャンプは、夏のSGキャンプとはひと味違う趣があります。

SG活動の今後の課題

身体的にどのような障害があろうとも、一人の人間として胸を張って生きて行け、周りの人たちが自然とサポートする、私たちはそんな社会を目指しています。SG発足以来40数年の間に、障害児・者を取り巻く環境は、随分と改善されてきました。街中の段差は解消され、人々の理解も進み、障害者の外出機会も増えてきました。

しかしながら、重度障害者の置かれている現状を見ると、自立とはほど遠い状況にあり、特に、「障害者の自立」に向けた行政施策の貧困さには目を覆いたくなります。

子どもたちを戸外に連れ出そうというところから出発したSG活動も転機を迎えています。これからのSG活動のキーワードは、『障害者の自立に向けたネットワーク』の拡大ではないでしょうか。キャンプ等のSG活動に参加した子どもたちもリーダーも、将来にわたってともに手をつなぎ、支え合うネットワークづくりと拡大が重要です。



びわ湖サマーキャンプ (2006年)

その重要な接着剤の役割を果たすのが「キャンプ」であることは言うまでもありませんが、日常的に障害児・者と関わっていく活動もさらに工夫を凝らす必要があります。ここ30数年間、幾度となく試行錯誤を繰り返しながら、未だ確固たる活動に至っていない「高校卒業後の障害児・者に向けた活動」を「S・M・C」を足がかりに、何としても軌道に乗せたいと考えています。



ジュニアクリスマス会 (2008年)

マンパワーの結集が鍵 ～ あなたもSG活動の一員に ～

40数年間にわたるSG活動に関わったグループ員、ボランティア・リーダーは優に1,000名を超えており、その中には、後に福祉関係の専門職の道に進まれた方も多くいます。

しかし残念ながら、今日の若者の価値観や活動範囲の多様化に伴って、SG活動に参加して頂ける学生世代が減少しています。年に一回だけ、2泊3日のキャンプすらリーダーの確保に苦労し、実施が危ぶまれる事態がここ数年続いています。

“障害児とともに歩む” SG活動を支えるのは、やはり若者たちです。一年間に数日、障害児のためのボランティア活動に参加して下さい。難しい専門知識は不要です。活動を通じて「車イス」の扱い方や「障害者の介助方法」等が身に付きます。SG活動の経験は、必ずその後の人生に大きなプラスとなるはずです。是非、私たちとともに活動して下さい。

あなたも、障害児・者と支え合うネットワークの一翼に参画しませんか？



2004年キャンプの一コマ